



---

# カフヴェハーネ

---

hamanasu9340

---

雨宿りの為に立ち寄った喫茶店には、白髪のお紳士がいた。

「いらっしゃいませ」

口に少しの髭を生やしているその人は、ごく自然な口調でそう言った。それが自分に言われている事だと気づいた時には、妙に顔が熱くなった。

店の中はとても落ち着いた雰囲気、どこか別の世界のようにも感じる。二階を吹き抜けにしたような天井の下でゆっくりとファンが回り、オレンジ色の蛍光が店内を照らしているその様子を見ると、どことなく時間も緩やかに流れている気がした。

右手にはカウンター席、左手には木で作られた机と椅子。そして一番奥には座敷席のように一段高くなっている場所が目につく。

「どうかされましたか？」

カウンターの向こうでガラスのコップを拭きながら、その人は微笑んでそう言った。燕尾服のような黒い服装が、とても似合っている。そこで僕はハッとしたが、店内の中に踏み出す事はどうにもできなかった。まだ高校生になったばかりの自分が、このお店の雰囲気とどうにも合わないように感じてしまったからである。

「どうぞ」

お紳士がにこやかな声で、カウンター席を示してくれる。そこでようやく僕は決心したように店内に足を踏み入れ、その人の前のカウンター席に座った。

背中に背負っていたリュックを下に置く。

客は僕以外誰もいなかった。平日の昼間なのだから当たり前なのかもしれない。外から聞こえる雨音が、店内に聞こえる程に静かだった。

「学生さんですか？」

その人は、拭いていたガラスのコップをその場に置き、カウンター越しに何かを取り出した。空耳かと思い、僕の口からは「え？」という何とも間抜けな声が出てしまう。

「ああ、すみません。若いお客様とはあまり接する機会が無いものでして」

その人が取り出したのは、金色のヤカンだった。運動部が回し飲みを使うような、そんなヤカンである。僕は一体何をするのかと思いながら、事の成り行きをじっと見ていた。

何も特別な事はない。その人はヤカンに水を入れて沸かし始めた。むしろ、それ以外の用途でヤカンを使った方が驚きではある。

「あの……」

「はい？」

無意識のうちに声が出ていた。

『何でそんなことしてるんですか？』

本当であればそう続けたい。確かに喫茶店でお湯を沸かすこと自体は不自然ではないが、普通そういうのはコーヒーマーカーなどに任せるのではないだろうか？ それか、もっとおしゃれなティーポットみたいな奴で沸かすのではないか？

「あ、いえ……」

しどろもどろになりつつ、その人からゆっくり目をそらした。カウンターの向こうには、きちんとコーヒーマーカーも置いてあり、サーバーの中には半分ぐらいコーヒが入っている。おか

しいのは自分なのだろうか？ そんな事さえ思ってしまう。

「学生さん、このお店にくるのはは初めてですよね」

「あ、はい」

その人は、ごく自然な調子で話しかけてきた。僕は少しうわずったような声で返事をする。

「お時間があるなら、何か飲んでいけますか？」

『店に入ったのだから、何か頼んでいけ』そういう感じの言葉じゃない。知り合いの家に言ったときの『何か飲む？』の方が声色としては近かった。

「じゃあコーヒーお願いします」

「はい、かしこまりました」

言った後で、しまったと思う。つい自然に口走ってしまったが、そのコーヒーの値段を僕は知らない。僕としたら三百円ぐらいを予想していたが、店の雰囲気からするともっと高いかもしれない。

僕は慌ててカウンターの上にあるメニューを見た。和紙のような紙がプラスチックの板に挟まれてメニューが書かれている。

『珈琲……百円』

え？ と、声が漏れる。安い。ファーストフード店のコーヒーとかだったら、そのぐらいだろうが、喫茶店でこの値段は安いだろう。

驚いたのはそれだけではなかった、メニューの上の方には手書きでこう書いてあったのだ。

『店長と話すとおコーヒー一杯無料！』

僕は呆然とその言葉を眺めていた。そんな僕の前に、白い湯気を立てたコーヒーが置かれる。改めて前を向くと、その人は胸に『店長』と書かれたネームプレートをつけているのが見える。

「熱いのでお気をつけ下さい」

そう言って店長は、砂糖とミルクをコーヒーカップの横に置く。

「あの……ここに書かれているのって？」

コーヒー、メニュー、店長の顔、と視線を移しながら聞くと、店長の目尻にしわが寄るのが見えた。

「お客さんとお話をするのが好きなんですよ、ですからそういったサービスをさせていただいています」

見てるこっちまで幸せになるような笑顔だった。僕はコーヒーに砂糖とミルクを混ぜながらその話を聞く。

「コーヒーの値段もそうなんですけど、お店大丈夫なんですか？」

「知人に言われたんですよ『自販機より高いコーヒーなんて誰も飲まない』『コーヒーがまずいんだから、人様の愚痴でも聞いてやれ』って」

普通顔をしかめるような話を、店長は嬉しそうに語った。

コーヒーを口に運ぶ。まずい、という話だったが、言う程まずいというわけではない。少し香りが強めで苦みが薄い、僕にとってはそれがちょうど良かった。

「そんなにまずいとは思いませんけど」

正直な感想だった。もちろん、僕はコーヒーの善し悪しなんて知らないし、素人の意見だがこの値段でこの味は十分すぎる程である。

「ありがとうございます。差し支えなければ、お客様のお名前を教えてくださいよろしいですか？」

「三津屋幸宏です」

ミツヤユキヒロ、それが僕の名前だ。

「三津屋様ですね」

「様はちょっと……」

「では三津屋さんとお呼びいたします」

いつの間にか、店長と話す形になっていた。別に嫌ではなかったが、本当にいつの間にかという感じだったので少し驚いた。

「三津屋さんは、いまおいくつですか？」

「……十五です」

自分で言って本当に場違いだな、と思う。友達と一緒に飲食店に入った事ぐらいならあるが、喫茶店に一人で入ったのはこれが初めてだ。

「お若い人から見て、このお店はどうですか？」

そう言われて、もう一度店内を見渡す。落ち着いた、シックな感じとでも言うのだろうか、全体的にはとても静かな雰囲気だ。主に店の中のものは木で作られている。椅子、机、カウンター、壁、ファン、そのどれもが薄い茶色だ。ファーストフードとか、レストランとか、そういう感じではない。大人達が集まるコーヒーハウス、そんな感じだ。

「例えばちょっと入りづらい、とか」

確かに、店の雰囲気は落ち着きすぎていてどこか窮屈な感じがある。しかし、それは自分がまだ子どもだからそう感じるのであって、店自体に何か悪い所があるわけではない。

「私としては、もっと若者ライクな感じにしたいんですよ」

店長が顎に手を添えながら言った。

「何かありませんかね、若い人でも気軽に入れるような……知人にも『客層が偏りすぎてる』って言われていますし。一応、飲食店営業の許可は貰っているんで、ちゃんとした食事も出せるんですけどね」

メニューを見てみると、トーストなどの軽食はもちろん、焼きそばやカレーなどといったものも書かれていた。値段は例のごとく、他と比べて格安である。

「三津屋さんは高校生ですよ？」

不意にそんな言葉が来た。油断してメニュー表を見ていただけに、吹き出しそうになる。手に持っていたコーヒーカップをなるべく静かにカウンターに置いてそれに答えた。

「まあ……そうですね。今日は……ちょっと……」

『学校はさぼってますけど』

そう続けるはずだった。自分から言っておいた方が、気が楽になると思ったからだ。

しかし、口からは次の言葉が出てこない。ごまかすようにコーヒーを飲んだが、さっきカップを置いたばかりなので、不自然な動きだと自分でも思う。

「今の高校生を相手にするなら、どういう風にすれば良いと思います？」

そうこうしているうちに話題を変えられる。いや、進められるといった方が良いのだろう。店長が気を利かせてくれたのだ。そう思うと、自分の中に妙な熱っぽさが残った。

「やっぱり、何か食べ歩ける物があると寄ってくれるんですかね？ 例えば――」

店長は笑顔で話しかけてきてくれるが、僕はどうにもその切り替えについていけなかった。どうして今言ってしまうなかったのか、その事が頭の中で気になっている。

「――三津屋さんはどうですか？」

まるで授業中に突然名前を呼ばれたときのように顔を上げる。その後、少しだけ視線を落ととして、残っていたコーヒーを全部飲んだ。

「食べ歩きの話ですよ？」

「はい。ですがコロツケだと同じような物になってしまうんで他に良いものは無いかと。私は天ぷらとかが良いと思うんですが」

「天ぷらですか？」

思わず声が高くなる。

「江戸時代は天ぷらの屋台があったらしいじゃないですか。ですからそれを現代に復活させれば」

「でも、天ぷらで食べ歩きとなると、難しいんじゃないですか？」

「ああ、そうですね。私は塩だけで大丈夫なんですけど、やっぱり麺つゆが欲しくなりますかね」

今気づいたのだが、というか今確信に変わったのだが、やはり店長は少しズレた所がある。見た目はいかにも真面目な老紳士、という風なのだが、話してみると実はそうではないんじゃないか、と思えてくる。敬語や振る舞い方はとても上品な感じなので、その見極めをすることがどうにも難しい。

と、そこでヤカンから湯気が立ち籠めてきた。元はといえば、このヤカンを火にかけたときから、微妙に違和感を覚えたのだ。

「あ、お湯が沸きましたね。どうです？ もう一杯コーヒーはいかがですか？」

店長がカウンターの上にあるカップに手を差し伸べる。カップの中では、濁ったコーヒーが茶色く線を描いていた。

「お願いします」

僕はカップを手にとって店長に渡す。もう取っ手を掴まなくても大丈夫なぐらいには冷めている。

店長はカップを手にとった後、カウンターの下から銀色の袋を取り出した。

「何ですかそれ？」

「コーヒー豆です」

店長が袋を開けると、コーヒーの匂いがした。もちろんコーヒーそのものの匂いではなく、もっと濁った匂いだ。

そこで店長はもう一度カウンターの下から何かを取り出す。手動で豆を挽くためのコーヒーミルである。

店長は、そのコーヒー豆をさらさらとコーヒーミルに入れ、袋をカウンターの下にしまった。その時に向こうのコーヒーマーカーが見えたのだが、その中にはまだコーヒーが残っている。保温中、とランプがついているのでまだ暖かいはずだ。

だとすれば、どうしてもう一度豆を挽く必要があるのだろう。

そんな疑問もおかまい無しに、店長は豆を挽き始める。ごり、ごり、と豆が砕けると共に、豆の中に詰まっていた匂いが店中に散っていく。木製の椅子や机に、その匂いがしみ込んでいくようだった。

「あ、三津屋さん。豆挽いてみます？」

店長がにこやかに聞いてきたが、僕は「良いです」とそれを断った。

しばらくの間耳を傾けてみる。ごり、ごり、という音とは別に、外から雨の音が店内に入ってきている事に気づいた。

「……」

そこで、急に店長に話しかけたくなくなった。今なら言える気がしたのだ。言わなくても構わないのだろうが、言ってみたいと感じた。

だが、何と声をかけたら良いか分からない。店長？ それとも喫茶店だからマスター？

「どうしました？」

不思議な顔を浮かべて、僕に視線を向ける。

「いや、その……店長さんをなんて呼んだら良いのかって思って」

「店長で良いですよ。前はマスターとか言われてましたけど、店長が一番しっくり来ます」

「何ですか？」

「マスターだと、何か強そうじゃ無いですか」

自嘲というわけでも無いのだろうが、店長はさらりとそんな事を言う。

「じゃあ店長」

「はい」

「ちょっと、僕の愚痴……というか、悩みというか、聞いてもらえますか？」

「ええ、構いませんよ。私でよろしければ」

店長が豆を挽き終わったのか、コーヒーミルを置いて、その中から粉末状になったコーヒー豆を取り出した。

「……僕、学校行ってないんですよ」

言ったとたん、すっと体が軽くなった気がした。言ってしまった、というちょっとした後悔と、もう戻れないという、半ば覚悟に似た感情が頭の中で渦巻いた。

しかし、店長は特に何かを言う様子もなく、自然な動きでコーヒーフィルターを取り出し、その上に紙を敷いている。

「なんていうか、学校があんまり好きになれなくて……」

なるべく深刻にならないように、明るい口調で言葉を述べる。店長はフィルターの上にコーヒー豆を移し、カップの上にセットした。

そして僕の中に妙な焦りが生まれた。頭の中が真っ白になった。他にも言いたい事があったはずなのに、それがぽっかり無くなってしまっていたのだ。



そんなはずは無い、そう思っても次の言葉が出てこない。

『僕は、学校があんまり好きじゃないから、学校に行っていない』

僕の中にあった悩みはたったそれだけなのか、と思う。言葉にして初めて、自分の悩みの小ささを知った。

いや、小さいわけではない。

僕の中ではとてつもなく大きな事なのだ。それがうまく言い出す事ができない。何かあるはずだ。そう思えば思う程、次の言葉が出てこない。

もどかしかった。

そんなものか、と思われたくなかった。

僕の悩みはもっと大きくて、もっと辛いものなんだ。そう言いたかった。

ただ言葉が出てこない。

見えない何か自分が邪魔してるんじゃないかと思った。

耳の中でやかましく雨の音が響いている。

「えっと……」

何かを言い訳をするように、言葉を紡ごうとする。頭の中にはいくつかの言葉ができていても関わらず、いざ口に出そうとすると一切出てこない。

「三津屋さん」

名前を呼ばれた。無意識のうちに体がびくっと震える。

「ナスの天ぷらは好きですか？」

店長がヤカンを持って、フィルターの上にお湯を注ぎ始める。糸のように細いお湯が、とぼとぼと音を立てて、フィルターの上に落ちていく。

「い、いや……ナスはあまり……」

「どうしてですか？」

「味と食感が、その……」

「好きじゃない」

言いづらそうにする僕の言葉を、店長が続けた。

「はい」

「では、学校は好きですか？」

何か胸の中に突き刺さる気がした。それでも、何とか口に出す。

「あんまり……」

「好きじゃない？」

「……」

胸の中にある何か、さらに深く突き刺さる。僕は眉をしかめて、じっとテーブルの上を見ている。ぼた、ぼた、とコーヒーがフィルターを通して、コップに落ちていく音が聞こえる。

止めてくれ、と思った。

言葉にしないでくれ、と思った。

「同じに聞こえますか？」

店長が僕の前にコーヒーを置く。最初に飲んだものよりも香りが強い。その匂いに、僕の頭の中がぐっと締め付けられるようだった。

「好きじゃないということが」

そうなのか、と思う。

だから、言葉に出せなかったのだろうか。

「違いますよ」

顔は見えなかったが、おそらく微笑んでいるのだろう。

「ですから安心してください」

コーヒーの上に僕の顔が映っているのが見える。

「違いますか？」

そこでようやく、言葉が出た。

「違いますよ。学校とナスじゃ全然違います」

「……そうですか」

分かってくれた？

いや、僕が分かったのか？

『好きじゃない』

もう一度、噛み締めるように思った。

ああ、違う。

こんなにも違う。

言葉にすると一緒なのに、その大きさは全然違う。自分が今悩んでいる事は、ちっぽけな事じゃないんだと思わせてくれる。

「さて」

店長が新しい砂糖とミルクをコーヒーの前に置いた。

「次に進んでみましようか」

「次？」

僕はきよとんとした顔で聞き返した。店長が鼻の下にある髭をちよいちよい、といじりながら続ける。

「一応私は人生の先輩ですからね。学校に行かない非行少年を、放っておくわけにもいかないんですよ」

非行少年、その言葉が変に心地よく感じた。それが自分の事を差している言葉だと思うと、妙に照れくさかった。

「ま、簡単に言うと、学校に行きましょうと説得をしたいわけでした」

「できますかね？」

砂糖とミルクをコーヒーに混ぜながら、まるで他人事のように笑う。

「がんばります」

その一瞬だけ立場が逆転したようで、それが面白かった。

「三津屋さんは、いじめられてるんですか？」

さく、と本当に簡単に店長が聞いてくる。

「いいえ、いじめられてるわけではないですよ」

「じゃあ友達がいない？」

「……何でそんなにあっさり言いますかね」

おそらく、それが一番大きいのだろう。あんまり好きじゃない、というのをよく考えてみると、それはクラスになじむ事ができないということであり、それはそのまま対人関係がうまく行っていないということだ。

「まあ、その通りですよ。学校では主に一人です」

「部活動などは？」

「帰宅部です」

「休み時間は？」

「基本、寝てますね」

「体育の授業とかで、ペアになるときは？」

「友達同士がもうペア作っちゃってて、そこからあぶれた人と組みます」

「それはまた……」

くすくすと店長が笑う。不思議と馬鹿にされてる感じはしない。言ってる自分もそんなに自虐的なことを言っているつもりは無い。

ミルクと砂糖を混ぜて薄茶色になっているコーヒーを一口飲む。やはり、一番最初に飲んだ物と比べると微妙に味が薄い。ただ、後味というか残り香と言うか、そういったものはより長く口の中で漂っているのが分かった。

「三津屋さんは、どうしたら良いと思いますか？」

「……はい？」

コーヒーカップをまだ持ち上げた状態で、動きが止まる。

「それは、店長が教えてくれるんじゃないんですか？」

「いかんせん、そういった経験が無いものでして」

店長は腕を組んで、わざとらしく唸っていた。

「それは、不登校の経験が無いってことですか？ 説得した経験が無いってことですか？」

「どちらもです」

何なんだろうこの人は、と思いながらもその状況を楽しんでいる自分がいる。

「三津屋さんは、どうお考えですか？」

「どうお考え、とは？」

「このまま不登校がずっと続くと思ってますか？」

え？ と声が出そうになった。

このままずっと？ そんな事があるのか？ と、そう思った時、言い知れない怖気が頭の先から流れてきた。

ああ、あり得る。

現に、今日は学校を休んでいるのだ。一応朝は、制服で家を出た後に公衆トイレで私服に着替

えるという手順を踏んだので、親は学校を休んでいる事には気づいていないだろう。

「……あ」

そこである事に気づいた。不登校が続くのかどうかとかそんな事ではなく、もっと目先の事である。

学校から親に連絡が行くかもしれない。

考えてみれば当たり前だ。何で気がつかなかったんだろうと今更ながら思う。

いや、でも一日ぐらいだったら大丈夫かもしれない。もしかしたら、何事も無く一日が過ぎるかもしれない。

じゃあ、明日は？

二日連続で無断欠席したら、おそらく連絡は来るだろう。そうしたら、親に学校をさぼっている事がばれてしまう。

ばれる？

あれ、もしかしてばれないと思ってた？

そっちの方があり得ない。結局はばれて、次の日は学校に行かせられるのだろう。

嫌だな、学校になんて行きたくない。

じゃあ、ずっと家にいる？

そっちの方が嫌だ。嫌だというか、怖い。それに慣れそうな自分が怖い。何の罪悪感も感じないで、ずっと家に引きこもっている自分になりそうで怖い。

もしかしたら、あり得る。

もしかしたら、お母さんとかお父さんは許してくれるかもしれない。本気で行きたくないと言えば、そうしてくれそうな気がする。

それが怖い。

そうなったらもう踏み出せ無い。一回不登校になったら、もう絶対に学校には行けない。

だから行きたいとかというと、それも違う。

行きたくないけど、行かないのもやだ。

ぐっと奥歯を噛み締める。

まだ湯気の立っているコーヒーを一気に飲み込んだ。まるで自傷行為だ。喉にある薄皮がべろりと一枚向けたような痛みを感じる。それでも一気に飲み干して、荒々しくカップを置いた。

「どうしたんです？ 昔やった恥ずかしい事を思い出したとかですか？」

気が狂った様な行動を目の当たりしたにも関わらず、店長は相変わらず店長だった。

「……そんなところですよ」

そんな答えしかできない自分が情けなかった。これだったら、素直に自分の弱さをさらけ出すほうがよっぽどマシだ。

「ありますよね、恥ずかしい話。私もよく会計を間違えて、皆さんに指摘されますよ」

それとこれとはまた違う問題だと思うのだが、わざわざ言う気にはなれなかった。

「話を戻しましょう。三津屋さんの中で、答えは出ましたか？」

僕はその間、店長の方を見る事はできなかった。それでも何とか言葉を出す事はできる。

「……分かりません。多分、行くとは思うんです。学校から家に連絡が来てたら、おそらく確実に。仮に今日連絡が来てなくても行くと思います。二日連続で休んだら、さすがに連絡が入ると思いますから」

「親は知らないんですか？」

その時、店長の声色が初めて変わった。真剣になったとかそういう事じゃなくて、ちょっとだけ驚いたような声だった。

顔を上げると、店長が目を開いてこっちを見ている。

「何がですか？」

僕は何の事か分からず聞き返した。

「三津屋さんが学校をお休みになつてるという事を」

「ああ、おそらく知らないと思います」

「親とは仲が悪い方ですか？」

「いや、そこまで悪くはないと思いますけど」

店長は眉間にしわを寄せて、そこに指をついた。困りましたね、という声が口に出さなくても伝わって来るようだった。

「でしたら、今三津屋さんはある種、行方不明の状態という事ですね」

「え？」

「家にもいない、学校にもいない。普通の親でしたら心配をしているはずですよ」

「……」

何も言えない。確かに言われてみるとその通りだ。連絡云々の事もそうだが、学校をさぼる事にばかり頭がいて、他の事を考えなさすぎた。

「まあ、悪い事は言いませんから、雨が上がったら家に帰った方が良いと思いますよ」

雨はまだ降っていたが、ここに入ったときより弱くなってきたように思える。家に帰ろうと思えば、帰れるぐらいの雨だ。あと数十分もしたら、晴れるまではいかないまでも雨はやむだろう。

「でも……」

それは何の解決にもならない。明日になったら学校に行って、何にも楽しくない生活を送るだけだ。それが嫌だから僕は今日、学校をさぼったんだ。

「三津屋さん、ナスの天ぷらが食卓に並んだときって、どうしますか？」

「……は？」

突然の事で意味が分からなかった。僕が頭の中で色々考えている時、この人はそんな事もおかまい無しに話を始める。

「いや、ちょっと気になっただけです。嫌いな食べ物が食卓に並んだときってどうしてますか？」

「いや……一応食べますよ」

「あ、食べるんですか」

意外、といった感じで店長が呟く。

「すごいですね」

「何がですか？」

僕は眉をしかめた。普通どんなに嫌な食べ物でも出されたら食べるしかだろう。

「嫌いな物も食べて、嫌いな学校にも行っているからですよ」

「……それとこれとは違うって、さっき言ってくれたじゃないですか」

同じ言葉でも、その中身は違う。これは今日、店長と話していて学んだ事だ。にも関わらず、店長はそれをひっくり返すような事を言っている。

「もちろん違います。嫌いな食べ物を食べれても、嫌いな学校に行けない、なんて事もありますよ。学校の方が強大なわけですから」

強大、という大層な言葉にどこか違和感を覚えながらも、僕は黙っていた。

「ですが、その共通点を探してみるのも面白いんですよ。例えば、三津屋さんは何で嫌いな食べ物を食べれるんですか？」

「それは……まあ、せつかくお母さんが作ってくれた物ですし、薬と思って食べれば」

その頃にはもう、カップの中のコーヒーは茶色く乾き、飲みきらなかった砂糖が底の方でどろどろと集まっていた。

「……学校も同じってことですか？」

店長が答える前に、僕が答える。自分で言っていて、何となく気づいた事があったからだ。

「親に行かせて貰っている。将来の事につながる……そういえば食事も学校も似てますね」

店長が面白そうに笑っている。僕の答えの一つ一つに頷き、そしてそれに対する答えを考えているようだった。

「いや、素晴らしいですね」

静かな拍手の音が店に響いた。褒められて悪い気はしないが、僕の眉間にはしわが寄ったままだった。

「さて、ここで質問をします」

拍手の音が止み、店長の両手が上がる。

「今の三津屋さんの気持ちを、ずばりお聞かせください」

「はい？」

「率直な気持ちで結構です。今、三津屋さんは一つの考えに行き着きました。それを思いついたときの感想は？」

「感想と言われても……」

「ハッピーかアンハッピーかで結構です」

こめかみに指をつけて考えてみる。だが、それについては考える必要が無い気がする。眉間にしわを寄せているんだから、答えは一つしか無いだろう。

「どちらかというと、アンハッピーですかね」

「それは、どうしてですか？」

店長の反応は、まるで僕がそう言うのを分かっているかのような反応だった。

「……自分で思いついた感じがしない、からですかね」

ほとんど無意識のうちに言葉が出ていた。店長の微笑みが、より強いものになる。

「確かに今言った考えはありだと思います。嫌な物を食べるのと、嫌な学校に行くのも同じ事だと思えば、行けない事はありません。もちろん、その大きさに違いはありますが、行けない程でもないんです。おそらく、僕は明日学校に行きます。最初に違うと言っておきながら恥ずかしいんですが、やっぱりそういった所は同じかも知れません。その考えに行き着けたというのは、僕の中で一つプラスになったと思います。ですが……」

言っているうちに、頭の中で自分の考えが徐々にまとまって来るのが分かった。しかし、その話の全体が見えてきて初めて、この話を続けたくないと思った。

「どうぞ、続けてください」

そうだろうな、と僕は笑った。ここまで言ったら、やはり最後まで言わないといけないのだろう。

「やっぱりそれって、悔しいんですよ」

店長が笑った。

何で悔しいんですか？ 何が悔しいんですか？ そんな事は聞かなかった。ただ、僕の言葉に対して嬉しそうに笑っている。

どうして悔しいのか？ そう聞かれたら僕はこう答える。

『全部店長の思い通りになった気がしたから』

別に店長の事が嫌いなわけじゃない。それでも思わずにはいられなかった。僕が一生背負って



くような重い悩みだと思っていたものが、こうも簡単にひっくり返されたのだ。

もしもこれが、僕一人で悩んで悩んで悩み抜いて、導き出した答えだったら、素直に喜べたかもしれない。でも、そうじゃなかった事がたまらなく悔しかった。

結局は、説得される事を望んでおいて、それがうまくいったことが嫌だったのだ。自分でも、なんて奴だと思う。

「つまり、私が邪魔だったという事ですね」

心の裏をえぐられたような気がした。言葉は悪いがそういう事である。僕は店長に感謝をしている反面、恨んでいるのだ。

「いえ、お気になさらず、普通そう思いますから」

その言葉に僕は顔を上げる。

「数ある選択肢の中から選ぶのは確かに楽なんですよ。でもそれが不快に思うときだってあります。どうしても良い事だったらまだしも、自分に関わりの深い事だったらなおさらです。『何を食べるか?』そういう事ぐらいだったら選択肢があって構いませんが、『どう生きるか』これに関しては選択肢は必要ないんです。自分で考えた方がよっぽど良い。ですから、考えてください。考えて考えて考え抜いて、新しい考えが思いついたときは……」

フツと、頬が上がる。

「またいらしてください」

それは、いつもの笑みではなく、どこか挑戦的な笑みだった。僕の背筋を、もう一度ゾクゾクしたものが這い上がっていく。

「お望みとあれば、『絶対に学校が好きになる方法』をお教えします」

「そんなのがあるんですか？」

「もちろんです。ですけどそれは、三津屋さんご自身がお考えになった方がよろしいと思います。そうでなければ、絶対に悔しがりますから」

「今回みたいにですか？」

「今回の比では無いですね。以前、知人に話した事があるのですが『人生の攻略法をネタバレされた』と怒ってましたから」

「そんなにですか？」

思わず身を乗り出したくなる。すごく胡散臭いのだが、店長が言うとなぜか信じたくなるのだ。

店長はその話をそらすように、ちらりと入り口のドアの方を見た。降っていた雨も今は止んでいるらしい。しかし、晴天というわけでもないの、いつまた降り出すのかは分からない。

「ああそれと、別に学校を休まなくても、普通のお客さんとして来ていただいても結構ですよ」

そう言いながら、店長がひよい、と僕の前にあったカップを手を取った。

「ですが今日の所はひとまず終わりにしましょう。もしも家に連絡が入っていたとしたら、親は心配しているはずですから」

僕もそろそろだと思い、財布からお金を取り出そうとする。

「私とお話しただけなので、一杯は無料ですよ」

僕が心配する事ではないが、これでお店はやっていけてるのだろうか。

百円をカウンターに乗せて、制服の入っているリュックを背負う。

「家に帰った方が良くないですかね？」

ふと疑問に思ったので口に出してみる。制服はあるのだから、このまま学校に行く事もできるからだ。

「怒られるなら、身内の方が良いでしょう？」

なるほど、怒られるのは確定というわけだ。だったら確かに先生より親の方が良い。先生に怒られたら、なおさら学校が嫌いになりそうだ。

ドアを開ける。目の前には小さな道路があるが、通行人は一人もいない。ブロック塀、止まれと書かれた標識、排水溝を流れる水の音。いきなり現実に戻された気がして振り返ると、ドアの向こうには店長が笑顔で手を振ってくれていた。

「またいらしてください」

僕は、店長に向かって軽く頭を下げ、店のドアを閉めた。

まだ雲はどんよりと湿っていた。それでも帰るまでは大丈夫そうだ。

次は晴れた日に来よう。そう思いながら、僕は誰もいない道の上を一人揚々と帰っていった。